

五●悟と

付き合っ

る恵が

爆乳女体化

させられて

宿儺様の

呪王

雄ち

んぽ

に完全敗

北す

る話。

女体化×レスプレイ×男尊女卑表現×集団凌辱×性暴力

呪術廻戦 unofficial fanbook

宿儺×爆乳女体化恵

+野薔薇&真希攻めとかいろいろ

(裏表紙に注意書き詳細)





五●悟と

付き合っ

る恵が

爆乳女体化

させられて

宿儺様の

呪王

雄ち

んぽ

に完全敗

北す

る話。

女体化×レスプレイ×男尊女卑表現×集団凌辱×性暴力

呪術廻戦 *unofficial fanbook*

宿儺×爆乳女体化恵

+野薔薇&真希攻めとかいろいろ

(裏表紙に注意書き詳細)

**R18G**  
残酷な表現を含みます

五●悟と付き合ってる恵が

爆乳女体化させられて

宿儺様の呪王雄ちんぽに完全敗北する話。

みたいわ南国



この本は、個人製作、非公式のファンブックです。  
原作者様・出版社様とは一切関係ありません。

二次創作をご存じない一般の方や、

関係者様の目に触れぬようご配慮をお願いします。

また、十八歳未満の方の閲覧は固くお断り致します。

五●悟と付き合ってる恵が爆乳女体化させられて

宿儺様の呪王雄ちんぽに完全敗北する話。



ふと恵が目覚めると、辺りは異様な光景だった。

血と呪いの気配に満ちた世界は、鮮烈な赤と禍々しい闇の色彩に支配されている。足元には無数の朽ち果てた人骨が、見上げたそこそこにもしやれこうべが山と積まれ、まさに地獄の様相だった。

(ここは——!?)

恵は思わず身構えようとして、しかし凄まじい違和感に、ばつと己を確かめる。

視線を下げればすっかり馴染んだ呪術高専の制服が見えるはずだったが、どうにもおかしい。黒い衣服の胸元ははちきれそうなほどに膨らみ、大きく盛り上がっていた。足元がやけにすうすうすると思えば見下ろしてみたら、上衣と揃いの生地、ひだの入ったミニスカートと、すんなりとした細い足が目に入る。なぜだか後ろ髪まで腰くらいまで伸びていて、視界の端でちらちら揺れた。

(——女になってる!?)

愕然としてそっと股間を撫でてみても、そこにあるはずのものがない。天地がひっくり返るような動揺のなか、覚えのある声が背後から聞こえてきた。

「……どうだ？ 俺からの心遣いは気に入ったか、伏黒恵」

「宿讎……ッ！」

ぎ、と奥歯を噛んで振り返る。

その先に、骨でできた玉座らしきものに腰かけている呪いの王、両面宿讎の姿があった。なぜか現代の格好ではなく、着物姿で座っている。

相変わらず偉そうに足を組んでにやついている呪術師の天敵の背後には、ずらりと裸の人間が何十人も並ばされているようだった。濃い霧の隙間から覗く肉体の造形が女のそれであることを認めて、恵は心底軽蔑した眼差しを宿讎へと向ける。

「その人たちを離せ！ こんなことをしてなにが面白いんだ！」

「ふむ。こんなこと、とは？」

「女性を、弱いものを馬鹿にするような扱いをして……！」

「はは——！」

「くそ、笑うなっ！」

「これが笑わずにいられるか！ その、馬鹿にされている弱者

とやらの中には当然、お前自身もカウントされているのだろうな!?」

「……!?」

カツとして一瞬忘れていたが、恵も今は女の身体になっているのだった。自らも性的な蹂躪の対象になったのだと今になって初めて自覚し、恵がわずかに宿儺から距離をとる。

「……はは。ようやく立場を理解しようだな」

「……これは、全部お前がやったことなのか」

「そうだ。この程度の小細工、俺にしてみれば児童に等しい。お前には特別に、極上の身体を与えてやったのだぞ。小躍りでもしてみせろ」

「意味がっ、分からない……ッ!」

声を荒らげる。宿儺を睨む。

この状況が、肉体の変化が、そして怨敵との対峙そのものが、まったく意味が分からない。心底そう思っただけ吐いた言葉が、どうしようもなく空虚に感じられた。

(意味が、分からない、よな……!?)

ここがどこで、なんのつもりで宿儺がここにいて、そしてなぜ恵が、やたら胸の大きな女の姿に変えられてしまったのか。なにひとつ分かりはしないのに、宿儺に見下ろされると思うだけで鼓動は乱れ、頬が赤らむ。

身体を女にされてしまったからなのか、目の前の呪いの王か

ら、とにかく凄まじい圧を感じさせられていた。それは暴く者としての、孕ませる者としての力強い暴威で——、言い換えればすなわち、雄としての傲岸だった。なぜだかきゅん♡と、恵の女の部分が甘く疼く。

「……精々、愉しませるがいい」

「……ッ!♡」

宿儺が鼻で笑うのを合図に、人影が二つ、こちらへ歩み出てきた。

一糸まとわぬ女たちの、その容貌が露わになると恵は反射的に息を呑む。

「……釘崎!♡ それにつ、禪院先輩……っ!♡」

恵は赤面してばつと目を逸らした。

いくら身体が女とはいえ、もともとはまだ15才の男子なのだ。突然同級生や先輩が素っ裸でやって来れば、そんな反応にしかない。

「よオ伏黒く……♡ なんだよ、こっちは見ないのか?♡」

「今なら見放題だぜ?♡ 私たちの、ハ・ダ・カ……♡」

「くくくくくつしよ、正気に戻ってください……っ!♡」

全裸二人が堂々として、きちんと服を着ている方が縮こまるのだからおかしい話だ。

野薔薇も真希も、平均よりずっと豊かな乳房をたぶたぶ揺らし、からかうような雰囲気です。恵に歩み寄ってくる。

「ほくら、野薔薇様のHカップ爆乳はいはいだぞ♡ 乳首もピンクで可愛いだろ〜?♡」

「タツパがでかい先輩のGカップバストもよく見とけよ♡ フিজカルギフトッドは張りが違うんだぞ、ツン♡って乳首が上向いてさ……♡ ほらほらほら♡」

「やめ……、あのっ、やめてくださいッ!♡」

二人とも自ら乳房を根元から掴み上げ、色づいた先端をわざと恵の方に向けてくる。女体化してしまったことで身長まで縮んでしまったようで、真希の胸と恵の顔とが、あまりにも距離が近い。当然そんな距離で異性の乳を見た経験はなく、恵はひたすらに戸惑った。

おまけに、なんとなく気づいてはいたのだが、どうも身体が思うように動かない。逃げることもできず突っ立っている恵を面白がり、たわわな四つの膨らみは、眼前でぼよぼよ弾んで翻弄してくる。目を逸らそうとうつむけばそれはそれで野薔薇と真希の下半身が視界に入ってしまう、恵は今や、見ていて可哀相になるほど顔を真っ赤にしてしまっていた。

「おい、じゃれるのめいいが務めを忘れるなよ?」

「申し訳ありませんッ、宿雛様ア!♡」

「んじゃ、せえの……っ、と!♡」

「わあああああつ?!♡」

宿雛が玉座から呼びかけると、これまで聞いたこともないような媚びた響きで野薔薇が応える。それに面食らっていた恵は、真希の手によってさらなる窮地へ追い込まれていた。

掛け声とともに、真希が恵の上衣を脇まで引つ張り上げる。その動作のあまりの雑さに、ばいばいんっ!♡と見事な超乳が勢よく飛び出した。ブラジャーをつけていない裸の胸は、身をよじるだけでぶるぶる弾む。

「ちよ……、ちよつと、ちよつと禪院先輩……っ!♡」

「あらあくおつきー!♡ これは野薔薇様越えのIカップくらいかなあ?♡ トップ100はいっつてるだろうね〜♡」

「正真正銘女で生まれた私らよりもよつぽどメスしてるよなあ♡ でかパイ女、なんとか言いなよ〜♡」

「ひ……いっ!♡ そ、んなつ、ぎゅうぎゅう揉まな……ッ!♡」

ガラが悪い全裸二人組に絡まれて、恵は一方的にいいようにされてしまっている。野薔薇と真希は、モロ出しにされてしまった乳の片方ずつを力いっぱい揉みしだきながら、わざとらしく悪態をついてくるのだった。

「ほんつと胸でつかいねえくめぐちゃあん……♡ 同級生なのになちよつと妬けるわア♡ おっぱいとお揃いでやたらでっかい乳首に釘刺してピアスみたいにしてやろっ♡ コーン



「はは、コイツ震えてるわ♡ 焦らされんのも好きか？♡  
ん？♡」

「ん……っ！♡ んん……っ！♡」  
身体は、相変わらず思うようには動かない。棒立ちになつて、野薔薇たちにされるがままで。

けれど衝動は、もうどうしようもないほどに膨れ上がってしまつていた。乳首に吸いつかれ、小さな口で、薄い舌でころころ先つぽを転がされて、きわどいところに二人がかりで脅しをかけられて。

（触って欲しい、もつと……、もつと、ちゃんと……っ！♡）

「お？♡」

「おいおい、ははは！♡」

「~~~~~……っ！♡」

気づけば、手だけが勝手に動いていた。

恵の両手はスカートの端を掴み、ペろん♡とめくり上げてしまつていた。これでもう乳も下腹も曝してしまつていて、情けないことこのうえない。そのうえ、宿儺の趣味なのかなんのか知らないが恵は普段穿いているボクサーパンツではなくフリフリの、いかにも可愛らしいピンクのパンティを穿かされていた。目ざとくそれを見つけ、本人との激しいギャップに真希がぎやははと大笑いする。

「真希さん笑いすぎ♡ ってかちよつと伏黒、なにこの体

勢？♡ もつと触ってくれつてこと？♡」

「……っわ、わかんない……っ♡ あうっ！♡」

「うっわ！♡ すこ、触る前からぐしよぐしよじゃん♡ やつば感じてたんだあ？♡」

真希がからかう通りで、薄ピンクの下の股の部分はぐしよりと濡れ、露骨に色を濃くしていた。

「あつ、あのつ、俺っ、ほんとにつ、身体……、動かなかつた

はずで……っ♡ わけわかんない、あつあつあつ♡」

「はいはい、かわいいこぶつてなねっ自分でおパンツ見せ子ちゃん♡ 濃いっ、染みが広がつてんぞ♡」

「わっかりやすくてチヨロいねえ♡ ほれほれ、お豆ちゃんころころころ♡ ころころころころころっ♡ くくっ、勃起して硬くなつてんじやん恵のクリトリスがさあ……っ！♡」

「っひ、あ、あ、あ、あああああああああああああああ  
あ………っ！♡」

二人の人差し指が恵の女性器を布越しに擦る。くちゆくちゆくちゆくちゆくちゅ♡と水つぽい音を立てて割れ目をなぞり、勃ち上がり始めた陰核を摘まみ、びんっ♡と強く弾いてみせる。

「はあっ♡ はあ♡ ああああっ♡ ああ……っ！♡」

恵が大きく口を開けて酸素を求めると、一緒に濡れた喘ぎが漏れ出た。

冗談みたいにポリューミーなバストを丸出しにして、ただ突っ立ってスカートを自分でめくって、それで異性の知り合いに股をいじられて。呪術師の天敵ともいえる男を前にしてなにをやっているんだろう？という冷めた感覚が、信じられないような速度でどんどん遠ざかっていく。

不自由な身体にも関わらず恵がやや足を広げたので、女たちははけたけた声を上げて大げさにそこを指差した。

「はー笑える♡へなちよこだなあ伏黒お♡ やっちゃいますよ、真希さん！♡」

「オツケー♡ 覚悟しなよへっぽこ相伝ちゃん♡ せえーの……っ♡」

「……っんびいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい……っ♡」

ぱくんっ♡と二人が再び乳首に吸いつき、その状態で激しく恵の性を愛撫する。それぞれ一本ずつで焦らしていたのを唐突に変え、十本の指で敏感な箇所を揉まれ撫でられほじくられたのならたまらない。

恵が思わず仰け反ると、野薔薇たちはぱつと乳から唇を離れた。

「どお？♡ ね、いきそうなんじゃない……♡ 私達にパイオツちゅくちゅくされてさあ♡ 指でほら♡ こうされたら……♡」

「ココがあつついの伝わってくるぜ恵♡ 気持ちいいんだろお？♡ なあ♡ 女の子の指で大事なこといじられたらさあ、イっちゃいそうなくらい気持ちいいんだろ……！♡」

「ふう……ッ、んん……っ！♡」

きゆう、と唇を噛んで瞼を閉じる、その姿がもはや、『私は感じています』と主張しているも同然だった。

そうこうしている間にも野薔薇と真希の指先が踊って、恵の感じやすい粒を、左右のひだを、そしてとめどなく涎を垂らす臍口までも、布越しに煽っては無責任に離れていく。

「あ……！♡ もう、やだ、やだああ……っ！♡」

「うわ♡ やらし〜！♡」

「腰振っておっかけて来てんなあ♡」

とうとう恵は、焦らす指を追って自ら股を押し当て始めていた。動かなかったはずの身体はこういうときにだけ少し自由になって、しかしそれがさらにもどかしい。

「な♡ イかせてやるよ、イかせてやるからさあ……♡ ところが気持ちいいか、ちよつとだけ言ってみな？♡ そしたらすぐに、サイコーに気持ち良くなれるぞ……？♡」

「ああぐじゅぐじゅだ……♡ もう限界だよな？♡ 分かる、分かるよ♡ 私たち女は気持ちいいのには勝てないんだ♡ まして、乳のでもいいやらしいカラダした女ならなおさらだっ♡ だからしょうがないんだよ♡ ほら、言ってみ♡」

言ってみな……!!♡」

「ひいん♡♡ あ……♡♡ んあ♡♡ あ、あ……♡♡」

ぐっちゅ♡ぐっちゅ♡ぐっちゅ♡ぐっちゅ♡と、二人がかりで陰部を揉まれ、恵の足はだらしなくガニ股ぎみに開きつつあった。切なく嬌声を漏らすのにそれ以上の刺激は与えられなくて、恵はかたかた身体を震わせる。

何度も音もなく口を開閉し、ふるる、と頭を振り。葛藤をしばらく続けたあとに恵は、小さな小さな声で女たちの指示に従った。

「……、お、股……♡♡ お股が、……♡♡ お股が♡、気持ちいい……♡♡」

「声ちっちゃ!♡♡ だし、なに?♡♡ お股ってなんだよもつとほかに言い方あるだろ!♡♡」

「……あ、アソコ、が……?♡♡」

「アソコねえ!♡♡ だっしめだなあっし恵♡♡ 一年坊つてエロ動画とか見ねーの?♡♡ んな風には言ってる?♡♡」

「……っわ、わ、かんな……♡♡」

「しよっがねーなあ……♡♡ ねえ、真希さん?♡♡」

「ウブだよなあほんと♡♡ しゃあない、人生の先輩が教えてやるよ……♡♡ お前の、ココはさあ、……!♡♡」

「ひうっ!♡♡」

真希と野薔薇が、揃って恵の性器を掴む。下着越しでヴァギナに中指を浅く差し込み、残りの指も使って恥丘までぐっつと鷲掴む。そうして二人は息を合わせ、恵の耳に唇を当てて囁いた。

「お・ま・ん・こ……♡♡ お股じゃなくてアソコでもなくてさあ、おお……まあ……ん……♡♡  
こっ♡♡ ま・ん・こっ♡♡ お前のココはあ、おまんまあん♡♡  
♡♡って、言うんだぜえ……♡♡」

「ひい……♡♡」

あまりの恥ずかしさに、思わず身がすくむ。

よく知った声で耳のすぐそばで強烈な淫語を使われてしまえば、脳味噌が痺れるような心地だった。

確かにその単語を知らなかったわけではないが、だからといって直接、それも異性が言っているのを聞いたのは初めてだった。一気に身体が熱くなって、それが羞恥によるものなのか、もしくはほかのなににかによるものなのか、もう本人にだって分からない。

「あ、なにこういうのもイケんだあ♡♡ 淫語好きい?♡♡ 恵ちゃあくん……♡♡ 野薔薇様と真希先輩がエツロいワード声に出しちゃうと興奮するのかな?♡♡」

「いい趣味してるなあ恵♡♡ いいぜ、付き合ってるやっつても!



なあ！♡ いいぜ、今回は特別に許してやる♡ 野薔薇様の濡れ濡れまんこ♡ くっばくっば開閉されてるぐっちよぐっちよのどピンクまんこ♡ 私のまんこ想像しろよほらああっ！♡ 同級生のおまんこ想像してイっちゃまえへなちよこ相伝呪術師があああああああああああ……っ！♡」  
「ひ……！♡ くぎ、さ、釘崎いいいい……っ！♡」

愛液でどろどろになった陰部を延々揉み続けながらそんなことを言われるものだから、恵の妄想がさらにまずい方向へとエスカレートしていく。野薔薇と真希、よく知った、とても魅力的な二人の少女に、くばあ♡とおっぴろげた女性器を至近距離で見せつけられる自分の姿を想像してしまうのだ。『くばっ♡ ほら、まんこ見ろよ♡』『私のまんこの中も見ろよお、くっばあ……♡』などと気軽に秘部を広げられる絵面もそうだが、そんなことを想像してしまう自分自身への非難めいた感情が矛先を変え、妙な背徳感となつて恵の官能を刺激する。二人に対して劣情を抱いたことなどないはずなのにどこかで性的に消費していたのではないかと、罪の意識がどうしようもないくらいに気持ちを高ぶらせる。

「ほら限界なんだろう、イけよ！♡ 上手にエロいこと言えたらイかせてやるからさっ♡ たとえばあ、……♡ な、簡単だろ？♡ お前はただ言われた通り言やあいんだよ♡」  
「くっくっい、いやらあっ！♡ 言えな、そんなの言えない

……！♡」  
「ならイかせてやんないぞ♡ さあどうする？♡」  
「ううう、うううううう……っ！♡ ああっ！♡ いやああ……っ！♡」

耳元に甘く囁かれた台詞は恵の頭の中のいやらしい想像よりもずつとずつと淫らで下品で、そんなことを言えと脅されても困るのに、女たちは責めを緩めない。イかせないように、けれどイきたくなるように、恵の乳首を舐め、下着越しに陰核を擦り、布ごと膣へ指先を差し入れてほじくってくる。

「ほおくら、め・ぐ・ちゃああああああん……っ！♡ 野薔薇様のまんこ想像してイけっ！♡ 釘崎野薔薇様のエロまんこ想像してアへるんだよ変態ッ！♡ 変態ッ！♡」

「先輩のまんまん想像してイけっ！♡ クールな真希先輩のおまんまん♡♡ ピンクのぐしよ濡れメス穴脳内鑑賞していいんだぞ！♡ まんこ見ろっ！♡ 禪院の女の格式高いおまんちよ見ろ！♡ 感謝してイけ！♡ イけよ、さあイけ……っ！♡」

「ほおああああああああああああああっ！♡ いやあああああああつ、ひやああああああああああああ……  
—————♡  
左右の耳へそれぞれに唇を当てられ淫語を浴びせられつつ、耳穴へと舌を突っ込まれぐちよぐちよべぢよべぢよべぢよにゆるる

るぐちゆる♡と舐めまわされたのが決定打になってしまった。口を大きく開けてべろを突き出す淫蕩な表情を浮かべた恵の思考回路は、たったひとつ「イきたい!♡」という衝動に丸ごと乗っ取られている。制御する能力を失ってしまった、恵はただただ願望に向かって突っ走るしかないのだ。具体的に己に快楽を与えてくれる二人の女へと、全力で媚びてみせていた。

「~~~~~♡はあああああああ……っ!♡  
イクイクイきたいれすもうだめ負けちゃう俺の負けれすうううううううううううう……っ!♡ イかせてくださいっ!♡ おまんこイかせてくださいっ!♡ おまんこイかせてくださいっ!♡ だらしなバカでおっぱいぽいんぽいんしてるはしたない伏黒恵15才をつ、思いつきりイかせてあげてくさいお願いお願いいいいいいいいいいいいいいい……っ!♡ お察しの通り童貞ですっ!♡ まだおまんこの味を知らないおぼこいめぐをおんなのこのおててでアクメさせちゃってくさいっ!♡ だって二人のおまんこ想像しちゃったからっ♡ 想像しろって言われたからだけどエッチなこと考えちゃったからっ、お仕置きしてくださいめぐのまんこにお仕置きっ、お仕置きいいいいいいいいいいいい……っ!♡ 女の味を知る前にお

んなのこの手でイかせてやってくださいっ!♡ 黒歴史作ってやってくださいっ!♡ めぐのおまんこいじってえっ!♡ めぐまんこ気持ち良くしてええええええええ……っ!♡ 俺はっ、同級生と先輩に脅されて二人のくばあまんこを想像してドキドキしちゃった変態ですから問答無用で罰してくれさいっ!♡ エッチなめぐのわるいこおまんこをこらあ!♡ って全裸の巨乳美少女が二人でお仕置きっ、し……っ!♡ んひあああああああああああああああああ  
あああおまんこイくうっ!♡ ありがとうございまひゅありがとうございまひゅおててぐっぽんぐっぽん強引びしゅとん  
んんんんんんんんんんんん……っ!♡ ご褒美、れしゅっ、きぼちいい……っ!♡ 同級生と先輩女子のダブル手マンでおまんこイつきゅううううううううううううううううううううううう……っ!♡ へなちよこめぐまんこイかせていた  
だきまひゅっ、あつあつあつあつあはあああああああああ  
あああああああああ……っ!♡

「なにこいつウケる♡」  
「リクエストよりも随分盛ったな、やっぱいじめられんの好きなんだろう変態っ!♡」

はしたない言葉を連ねるのに合わせて手淫をどんどん荒々しくされ、最終的に恵は、揃えた指を男根に見立てた疑似ピス



と、野薔薇たちが甘えた声を出して駆け寄っていく。

「宿雛様、私頑張りました♡ 上手に伏黒をアクメさせましたよ♡」

「宿雛様、褒めてください♡ 真希の頭なでなでしてえ♡」

「ふむ、よしよし……♡」

膝を折り、野薔薇と真希が玉座に座っている宿雛にまどわりつく。普段の彼女たちからは想像もつかない発言をして、おまけに頭を撫でられた真希は、それこそ犬のように喜んでその手に頬を擦りつけていた。ある意味性的な奔放さよりもよほど衝撃的な光景を前にして、恵は自分のなかのなにかががらりと崩れていくような感覚がした。

「……伏黒も、こつち来なよ♡」

だから、なのかもしれない。

野薔薇が呼ぶ声に、無意識に応じてしまったのは。

大切ななにかを失ってしまったって、縋るものが欲しくなっただけ。それが危険な誘いだと認識しているのに、恵はふらふらと立ち上がり、三人の方へ近づいていってしまったのだ。

「……そのみつともないカッコ、宿雛様によく見てもらうんだな……♡」

「……♡♡♡♡♡……♡♡」

真希に言われて、はつきりと自分の格好を自覚させられてしまう。細い身体に無理やりくつつけたみたいな豊満な胸は服を脇までめくりあげられて露出し、いわゆる「おっぱんつ」という状態で、愛液に濡れた、裏返った下着がかぶせられている。恵自身はその俗称こそ知らなかったが、これが己に対する加虐なのだということは十分理解できていた。今は下ろされているスカートの下で大切な箇所がきゅんきゅん疼き、とめどなく透明な淫液を漏らす。私はこんなにイヤラシイ女です、と、アピールするような恰好で宿敵の前に立たされ、なぜだか恵は、確かに奇妙な興奮を得ていた。

「浅ましい……♡ 感じているな？♡ これぞ雌、と言わんばかりだ♡ 乳首がピンピンになっているぞ……♡」

「♡♡♡♡宿、雛……♡♡」

「宿雛様あ、こつちも見て♡」

「宿雛様あん♡」

「！♡」

恵の目が見開く。

宿雛の膝のあたりにはべっぴんだった二人が着物をはだけ、彼の性器を露出させていた。ぼろん♡と飛び出した宿雛の男根は、その大きさも血管を浮き立たせて勃起している凶悪さもなに

もかまがいかにも雄々しく、わずか一瞬で恵を釘づけにしてしまったのだった。

「あ……！！♡」

「どうした、伏黒恵……♡」

おかしな反応に気付いた宿雛が、面白そうに挑発してくる。けれどがんと頭を殴られたようなショックで恵は言葉を失っていた。眼前の、確固たる雄の象徴。その、心地良いまでの傲慢な圧に、身体の全神経が反応する。それは、支配者を戴いた愚民の高揚。仕える主人の足を喜んで舐める奴隷の、ほの昏い背徳の愉悦。

「……っは……♡」

つまり恵は、発情してしまっていた。

犯されるために、否、犯してもらうために、恵の女の部分からはこんこんと大量の涎が溢れ出す。己の身体を正しく使っていたただかなくては、という倒錯した確信によって、雌の準備はもはや万全になっていた。それが肉体の女性化に伴う単なる生理現象なのか、もしくは生来、そういった感覚を恵が気質として持っていたからなのか。この場においては両面宿雛だけが、その理由を知っていた。

「……俺の、魔羅が欲しければ、相応のねだり方がある……♡」

お前ら、手本を見せてやれ♡」

「はいっ、宿雛様っ！♡」

「承知しましたあ♡ じゃあ、ん……………」

「わ……………」

しっしっ、と宿雛が手を払う仕草をみると、途端に野薔薇と真希が立ち上がった。そして突然熱烈なディーブキスをかましたので、恵は驚いて声を上げる。それにも構わず二人はねつとりとした口づけを交わし、場の雰囲気をおかしくさせていく。野薔薇の胸と真希の胸が互いにぶつかり押し合っ、しなやかな身体の間でもにゅん♡と淫らに形をゆがませた。

「さあ、ご覧くださいませ宿雛様……………」

「ちゃんぽ乞いオナニー♡ ご披露させていただきました……♡」

「な……………」

そう宣言すると二人は、それぞれの手で、お互いの陰部をいじり始めた。野薔薇の手は真希の性器に、真希の手は野薔薇の性器に伸びて、くちゅくちゅくちゅくちゅくと、巧みな指使いで快楽を与え合っていく。

「あ……………♡ 真希さんっ、おまんこ気持ちいい……………」

「野薔薇のおても気持ちいいぞっ♡ そこだっ♡ クリを、クリちゃんもっといじめてえ……………」

「ひえ……！♡」

いったいなに見せられているのだろうと思うのに、少しも目が離せない。美少女が二人して舌を絡め合い切なく喘いで、相互に愛撫を施しているのだ。くちゅ♡くちゅん♡という水音はますます大きくなり、二人の興奮を恵や宿儺に伝えている。「さあご覧になってください……っ！♡ あなたさまのしもべの、はしたない姿を……っ！♡」

「お恵みをいただけますように♡ 精一杯っ、醜態曝しますううううううう……っ！♡」

「~~~~~っ!?♡」

これ以上があるのかという痴態を、軽々と二人は越えてくる。媚びる台詞を口々に吐いたあとで、野薔薇と真希は、同時に片足を持ち上げたのだった。

日頃鍛えた筋力がいかんなく發揮され、不自然な片足立ちでも、二人ともきちんと立位をキープできている。それが宿儺に向けてわざと割れ目の中身を見せつけたいかにも雌犬らしいガニ股ポーズなどでなければ、拍手でも送りたくなるような出来栄えだ。

「あっあっ♡ わんちゃんのおしっこポージングでえええええええええええ……っ！♡ 野薔薇がおまんこばっかんしますう宿儺様っ♡ メス犬野薔薇の片足上げオナニーご覧ください♡ あああ真希さん上手ううううっ！♡ そこ

っ、それっ、もっと広げて……っ！♡ 宿儺様によおく見えるようにっ♡ おまんこのビラビラを思いっきりひっぱってください……っ♡ 右側のビラビラ伸びちゃうっ♡ かつたぼだけビラビラ伸びて恥ずかしいおまんこになっちゃううう興奮しちゃうっ！♡ みっともないビラビラ伸びきったおまんこ宿儺様に罵倒されたいですう♡ はあはあはあ♡」

「私のおまんこも見てやってください宿儺様♡ 自分より巨乳の後輩の指で♡ 先輩ヅラした色素沈着黒ずみまんこをお♡ クチュクチュクチュクチュ♡ っでされたら気持ちいいですおっおっ♡ 膣穴っ♡ かつぼじられてるっ♡ 指二本ではかっ♡ っっておクチ開けられちゃってりゅううううっ！♡ 勃起クリクリもねじられてつねられて爪立てられてるううっ！♡ エグいつ！♡ 野薔薇の手マンエっぐいよおとおおお……っ！♡ ギフテッドとか関係ない♡ まんこは弱いつ！♡ おまんこは弱いのおおおお……っ！♡ ワンコのしょんべんポーズでいくっ！♡ 大事なお股の中身どうぞご覧くださいっしながらいくうっ！♡ 禪院って立派な名のついた血筋上等のおめこ穴ご開帳してイかせていただきまひゅうううっ♡ 呪術師とか♡ 知りません！♡ だってもともと呪力ゼロだしっ♡ 祓うべき呪いの王だとかそんなおつきなおちゃんぽ様には屈服するしかないじゃないですかあっ♡ 後輩とダブルガニ股オ



悠仁とそっくりな姿でそんな振る舞いをする彼を恵は一応見下ろしてはいるが、実際はみつともなく土下座をして額を地にこすりつけているのとはぼ変わらない心境だった。その証拠に、恵の足は蛙のごとく不格好なガニ股に開かれ、股間には細い指が伸びて、大切な部分をクチュクチュクチュと人前でいじっている。逆の手でスカートを挿んで持ち上げているので、そんな動作は宿雛からよく見えているはずだった。

「その布をしっかりとめくれ。邪魔だ」

「仰せの、通りに……っ！♡」

「退屈だな。自慰の実況でもしてみるか。とびきり下品なのを頼むぞ」

「よ、喜んでええええええ……っ！♡ ふ、ふうっ、伏黒恵、はっ♡ 両面宿雛様の御前でっ、おま、おまんこもみもみつ♡

ガニ股でおまんこもにゅもにゅしてオナニー、をっ♡  
して……っ！♡ おちんぼ、欲しさにっ♡ オナニーおまんこお見せちゃってまひゅっ♡ 恥ずかしいっ♡ これ恥ずかしくってしゅっごいきぼちいれひゅ宿雛様あっ！♡」

恵が宿雛の指示通りスカートをウエスト部分に巻き込んで陰部を露出させ淫語を連発し始めると、宿雛の唇が下種な形にいつと緩んだ。

「上々だな、浅ましい雌め♡ 言葉遣いにも多少慣れが見えて、……つまらんと言えばつまらん♡ おい、次は俺でなく小

僧にそのはしたない穴を見せているつもりでやれ♡」

「……な……っ！♡」

せつせと自慰に勤しんでいた恵でも、このオーダーには愕然とした表情を見せた。しかしそれはすぐにとんでもなく淫らな雌顔に崩れ、速やかに指の動きが再開する。

「そんな、虎杖にこんな……っ！♡ こんなの見せるなんて、やらし……っ！♡」

「馬鹿が、いやらしい真似をさせられるのがお前たち雌の本懐であるうに♡ それ、名を呼んでみせろ♡ 実況はどうした

♡ おまんこもみもみ、だったか？♡ お前の好きなようにオナニーとやらをするがいい♡」

「ひいっ、ひい、ひいひいひい……っ！♡」

先ほど自分が発した言葉がブーメランのように突き刺さって、興奮と動揺で脳味噌をぐちゃぐちゃに掻き回してくる。どつと愛液が溢れて女性器の感度が増し、いよいよ恵は激しく自慰行為に耽った。

「あ、あ、あ、虎杖、虎杖いっ！♡ おまんこ♡ やだあ、いじってるの見ないでえ♡ 違うのっ、こんな♡ 立ちっばなしで蛙さんの足して虎杖のまん前でまんまん揉むとか♡ そんな状況考えたこともないのっ！♡ 気持ちいいけどっ、しゅっごく気持ちいいけどこんな違うのおおのおおのおおのおお……っ！♡ 俺、俺、は、虎杖っ！♡ 虎杖が見て

る前でおまんこ見せつけオナニー気持ちいい……っ！♡ 虎杖におまんこ見てもらうのすっごいすっごいきぼちいい……っ！♡」

「はははは、はは！♡」

宿雛に大声で笑われて、それすらも快楽のスパイスになってしまふ。涙で滲んだ視界には、悠仁の幻さえ見えるように思えた。彼は真つ赤な顔をして驚いて、それでもやはり興味が勝ったのか、食い入るみたいに前傾姿勢になって恵の女の部分を覗き込んでいる。

「あああつ、虎杖……っ！♡ 虎杖い！♡」

「まあ分かつてはいたが本当にド変態だなお前は！♡ よいぞよいぞ、好きに乱れる！♡ お前には下劣がよく似合う！♡」

「ひいん……っ！♡」

愚かな真似をしていると、分かっているのにやめられない。

『伏黒、なにしてんのマジで？♡』

『そんなとこ他人に見せちゃダメだろ、胸もだし、そんな、いじってるどこなんて……♡』

『宿雛に犯されたいって正気？♡ だって呪術師なのに、宿雛にっ、やばいだろ……♡』

『伏黒って、めちゃくちゃいやらしい女だったんだな……♡』

「~~~~~虎、杖いい……っ！♡」

頭の中で勝手に作り上げた悠仁が喋った台詞で、身体がかあつと熱くなる。ああこれが欲しかったのだと、満たされるかと思いきや逆に飢えた。

もつと、もつと、と、本人も知らぬ間に闇色の瞳へネオンカラーのハートマークを浮かべ始めた雌を指差し、呪いの王はゲラゲラと腹を抱えて嘲笑する。

「馬鹿め、馬鹿女め！♡ さすが俺の見込んだ雌犬だ、自ら妄想で滾るとは！♡ 惨めな畜生が、本性を見せろ！♡ 無様を曝せ、曝け出せええっ！♡」

そう叫んだ宿雛は「小僧が見ているぞ♡」だの「まんこが大洪水ではないか♡」だのと一方的に恵を煽り、言葉のみで彼女をひたすら追い詰めた。結果、恵はほぼ錯乱状態に陥りながら、「……ゆるじいいいい……っ！♡ めぐのオナニーまんこ見てええええええっ！♡ びしょびしょでしょっ♡ マン汁しゅごいれしょっ!?!♡ これはおまんこの涎だよっ、犯してもらおう準備なんだよお……っ！♡ だから犯してっ♡ パコって♡ めぐの処女膜ブチって破ってゆるじのお精子どびゅどびゅ注いでっ♡ ゆーじのおちんちんめぐのおまんまんにぶっこんでくだしゃい！♡ ばかっ♡ ほらおまんちよフルオーブんだよっ♡ おまんこの肉ぎゅちぎちにかっ開いておねだりおまんこだよっ♡ ゆーじのおちんちんちようだい♡ おちんちんっ、ちよおだああああああああああ

あー………いいいいいいいい  
 ……っ！♡ ゆーじのちんちんっ！♡ おちんちんちよう  
 だあいっ！♡ めぐのまんこにちようだいっ！♡ おまん  
 こにちんちんっ♡ 同級生のおちんちんっ♡ おちんぼこ  
 気軽にハメてびゅって中出しして♡ 無責任な学生ちんちん  
 でめぐの将来ダメにして♡ 善人の子種汁でデカ乳女の人生  
 早々に破壊してくださあいっ！♡ ちんちん♡ ちんちん  
 ♪♡ まんまんちんちんっ♡ ゆーじのちんちんっ♡  
 お・ち・ん・ち・ん………っ！♡ パコパコしてえっ！♡ パコ  
 ♪♡ パコっ♡♪ そんなで処女おまんこにどぴゅどぴゅ  
 う♡ってしてええええええ………っ♡♪」と絶叫させら  
 れ、ガニ股立位、女性器全開状態で絶頂の一部始終を宿儺に観  
 察されてしまったのである。  
 「く、ハハっ！♡ ああ笑った笑った………♡ ここまで愉快  
 な見世物もそうそうあるまいな………♡」  
 深く深く極まった直後、だらしなく足を開いたまま地面に倒  
 れ込んでしまった恵をひよいと抱き起こし、宿儺は彼女を四つ  
 ん這いにさせる。  
 「興が乗った、犯してやろう♡ 札を言うところだぞ相伝？  
 っ！♡」

「………っ、あ、あり、がとう、ごじやいま………んぎよおとお  
 おおとおおとおおとおおとおおっ！♡」  
 待ち望んだこととはいえ、宿儺の巨根が侵入し、処女膜を破  
 った際に出た嬌声はどちらかといえば悲鳴に近かった。  
 「あ、あ、ウソおとおお………♡ やめ、見ないでえ………っ♡」  
 「ぎーんねん、ウソじゃないぜ♡」  
 「こない女、本物の真希先輩に決まっただろうが♡」  
 「ひん………っ！♡ うううっ、イクうううう………っ！♡」  
 さらに悲劇は犯されている恵を女二人が鑑賞しにやって  
 きたことで、好奇心丸出しの遠慮のない視線に曝され恵はすぐ  
 にまたイってしまった。犯されているところを見られている、  
 それも女性に見られるなんて恥ずかしい、という思いが、ます  
 ます恵を墮としていく。  
 「こんっ、なあああああ………っ！♡ 釘崎たちに見守ら  
 れながら呪術師の天敵と処女強奪セックス♡だにやんてええ  
 ええええええ………っ！♡ ひいっ、ひい………！♡」  
 「はははは感じておる、感じておるなあ伏黒恵！♡ 客人が  
 知り合いの方が燃えるたちか、ド外道だな！♡」  
 「ほんとですね♡ こんな変態と同級生だったなんてこっち  
 が犯されるところでしたあ♡ 成敗成敗♡」  
 「こんなエロガキが後輩で私の処女も危なかったです♡ ち  
 やんと宿儺様に膜を破って中出しで消費してもらえてよかつ

たあ♡」

倫理観皆無の雑談に重ね、ばんっ！♡ばあんっ！♡と、宿雛の下腹と恵の尻とがぶつかり合う打音が響く。手加減など微塵もなくただ宿雛の思うままに突くだけという交わり方は、それでも恵に強烈な悦を与えていた。

「ほぎよっ！♡ んおおっ、おぼおっ！♡ ちんぽっ！♡ つかいっ！♡ 奥まで……っ、んごえっ！♡ ひう、んぎゆううっ♡ イイよお……っ！♡」

「雌犬どころか豚のようにみっともない喘ぎだな！♡ だがお前にはびつたりだっ♡ 褒美をやるう……、おい！♡」

「はあい♡」  
「かしこまりましたあ♡」

「あ……！♡」  
恵を犯しつつ宿雛が顎をしゃくると、野薔薇と真希は恵に歩み寄り、足をガニ股に開いた。そうして大陰唇に手を添え、ゆつくりぐばあ……♡と左右に割っていく。

「……っわ、あ、あ、ア、ああああああ……っ！♡」  
「はあ……い、ご開帳♡」

「どうよ、私たちのま・ん・こ♡ こんなに近かったらマン臭まで嗅げるんじゃない？♡」

「~~~~~」  
真希の言う通りで、むわあ……♡と、嗅いだことのない

生々しい香りが鼻孔へ届く。恵の視界は今、野薔薇の女性器と真希の女性器の、がばあ♡と全開になっている桃色の媚肉にほぼほぼ占領されてしまっていた。

確かにちらりと妄想はしたが、現実には目の前で見せられると衝撃の度合いが半端ではない。元が男だからか、現状は女体だというのにこんな場面で反射的に興奮してしまっ、恵は激しく混乱した。

「同じ学校で学ぶ者同士、性器の形状まで分かり合えて良かったなあ？♡ 堪能するがいい、許してやる♡ ただまんこを締めるのは怠るなよ……♡ よし、お前たち！♡」

「はいっ♡」  
「そら、よっ！♡」

「おぶうっ！♡」  
恵の顔面に、ぶちゅぶちゅと二人の陰部が押し当てられる。そのまま宿雛が腰を振り始めるので、ぬるぬる滑る濡れた女陰が上へ下へと恵の顔を往復した。独特の質感を持つひだが恵の鼻を、唇をなぞり、雑巾がけでもするかのようにそこをぐつしよりと湿らせていく。

（釘崎と、禪院先輩の……っ！♡ アソコがっ、俺の顔にいいいい……っ！♡ すげえ濡れてるっ、びっしょびしょのまんこがあつちもこつちもべちよべちよくっついてきてるうううう……っ！♡）



るるッ！♡びゅくびゅくびゅくびゅく……！♡と断続的に  
 精液を注ぐたび恵の身体が派手にびくつくので、犯す側として  
 はそれが愉快で愉快で仕方がない。いったばかりだというのに  
 またむらむらと加虐心が湧いてきて、宿雛は恵から雑にペニス  
 を引き抜いた。力なく地に倒れた雌のヴァギナがまだ物欲しそ  
 うにヒクヒクとしているのを見て、紅い瞳が残酷な形に弧を描  
 く。

「まだ腹が減っているのだろうか♡ もう一発欲しければ、そ  
 うだな……♡ そいつらの下の口を舐めて回れ♡ 男欲し  
 さに仲間さえ容易く裏切る、お前の卑俗さを見せてみる！♡」

「な、あ……っ♡」

そんなこと、するわけないだろ。

宿雛を振り向いたそのときには、恵は確かにそう思っていた。  
 しかし、「さっさとしろ愚図が♡」と罵りながら宿雛が男根を  
 手に取ってぶらぶらと揺らしてみせると、一気に理性が崩壊し  
 てしまう。さっきまで、恵を深く深く犯していたあの一物。あ  
 れが吐き出す白濁の奔流、まだ清らかだった処女穴を穢される  
 あの快感を思えば口からは涎が、膣からは精液交じりの本気汁  
 が、とろとろたらたらと溢れるのだった。

見回した先には真希と野薔薇がM字開脚をして仰向けに寝  
 転がっており、指でくは♡くっは♡と陰裂を開け閉めして恵  
 を誘っている。

「す、み、ませ、先輩……♡ 俺もう、おちんぼ様の、ことし  
 か……っ！♡」

「当たり前だろメスなんだから！♡ ほらいけよっ、まんこ  
 の奥までしっかり舌入れてくれよな……っ！♡」

「~~~~~先輩っ！♡」

恵が真希の太ももをぐいと両手で押さえ、開いた割れ目に口  
 をつけた。

（……っこれが、女の………！♡ 禪院先輩のおまんこっ、愛液  
 の、味……っ！♡）

「んああああああああ……っ、あ………！♡」

早く犯されたいからなのか、それとも単純に女の性器を見て  
 昂つたからなのか。自分でもよく分からない高揚した状態で、  
 恵は真希の性器を吸いしやぶる。初めてそんなことをするのだ  
 から、作法なんてさっぱりだった。ただ衝動の荒ぶるままにぶ  
 りぶりとした秘肉に舌を這わせ、膣口にも舌先をねじ込み、零  
 れる淫液を夢中ですする。じゅぶりゅりゅりゅっ♡べちよべ  
 ちよねぢよっ♡じゅるじゅる、じゅるるる……っ！♡とひと  
 しきり味わったあたりで野薔薇の足が伸びて来て、恵の頭を強  
 引に奪い去った。

「こっちも舐めろってバター犬っ！♡ わんと言えっ！♡」

「くぎさ、んぶっ！♡ うぶっ、むぐっ、ふむむむ……っ！  
 ♪」

ろくに会話もできぬまま、恵は両足で後頭部を掴まれ、ぶぢゅ！♡ぶぢゅ！♡と強制的に女性器へキスをさせられていた。

(釘崎、の、……マン汁うううう……っ♡♡♡ すごいつ、禪院先輩となんか、味、違……っ♡♡ これもおいしいっ♡♡ 興奮しちゃうっ♡♡ 釘崎のまんこっ、まんこおとお……っ！♡♡ エッチなお汁っ♡♡ あっあっあ……っ！♡♡)

淫液に狂わされ色欲の扉を開いてしまった恵はもはや、そつと野薔薇が頭を解放してやっても、延々そこを舐め続けていた。恥も外聞もなく必死になってむしやぶりついて、陰核を唇でしごき、蜜壺を奥まで舌でほじって、乳飲み子のようにちゅうちゅう愛液を飲み下す。

「……っ♡♡♡ 釘崎っ、まんこおしいひ……っ♡♡ お前のまんこすっごくおしいよお禪院先輩と味が違うけどっ、一緒にっらいおいしいっ！♡♡ ヒダヒダの裏のまんカスっ！♡♡ これもっ、すごくて……っ！♡♡ メス臭やばいっ！♡♡ 釘崎のまんこエロくてグロくてドキドキするっ！♡♡ こんなおまんこしてるやつがっ、毎日そばにいたなんて……っ！♡♡」

「キモっ♡♡ お前も今は女じゃんかバカめぐうっ♡♡ そんなでかい乳してもやつぱ中身男なんだまんこ大好き星人なんだっ♡♡ まんこ好き♡♡ っ♡♡ っ♡♡ っ♡♡ 同級生のまんこ舐めまくるなんてほんと変態だしサイテー♡♡」

「ごめん釘崎い……っ！♡♡ 禪院先輩も……っ！♡♡ まんこ舐めちゃってごめんなさいっ！♡♡ おいしかったです……！♡♡♡ マン汁も、まんカスもしっかり味わいましたっ！♡♡♡」

♡♡ 仲間のまんこなんて舐めるどころか見てもダメなのにつ、ぢゅーぢゅー吸って舌突っ込んでほじってまん穴とめちやくちやディーブキッスしちゃいましたっ♡♡ 気持ち良かったです♡♡ 仲間のまんこサイコー♡♡ 仲間まんこのクンニ大好きですっ！♡♡ おまんこぺろっ♡♡ ぐぢよぐぢよのおまんこぺろぺろお♡♡ マン毛口に入っちゃってもおいしくって止まんないっ♡♡ 釘崎のまんまんべロでほじほじがやめられませんほじほじほじっ♡♡ ほじほじほじほじ♡♡ おツユっ♡♡ じゅるじゅるうううううううう……っ！♡♡♡ 釘崎のまんこっ♡♡ おまんほおおお……っ！♡♡」

「んあっあっイイっ♡♡ クンニイイよお……っ！♡♡」

「はっは、だいぶ出来上がったな伏黒恵よ♡♡ もっともっど乱れてみせろ……っ！♡♡」

宿雛から野次が飛び、新たな命令を雌犬たちに発する。

三人は四つん這いになり、輪のかたちに並ばされていた。恵の前には野薔薇の尻があり、野薔薇の眼前には真希の尻が見えている。ばん、と宿雛が手を打ち合図を送ると、三人は同時に片足を上げ、雄犬が用を足すような姿で互いの性器を舐め始めた。

「そおれそおれ、競え雌どもっ！♡ 一番先に相手をイかせたやつにこの肉棒をくれてやる！♡」

「あっあっ伏黒おすごい勢い……っ！♡ そこっ、そこは違ううううっ！♡」

「喘いでないで真面目にやれって野薔薇っ！♡ 私だって宿雛様のちんぽ欲しいんだから……っ！♡ イけよ恵っ！♡ 先輩のクンニでイけええええええ……っ！♡」

「あ、あっ、んおおおお……っ！♡ 舐めて、舐められてっ、こんなああああああ……っ！♡ 気持ちいいっ、気持ちいいよおおおおおお……っ！♡」

真希に激しく割れ目を舐め回され、悶えつつも恵は必死に野薔薇を責めた。なりふり構わず、というよりどうしてもそこを舐めたくなくて、皺の入った肛門を平たくした舌でれるれろと撫でる。それからそこへ鼻先を押し込みつつ、伸ばした舌先で膣口を雑にほじる。

「あっあっ♡ 真希さんのおまんこ舐めながら伏黒にアナルいじめられてっ、まん穴もほじくられて……っ！♡ いくいくなにこれなんなのこの状況おおおおおおっ！♡ ケツ穴っ♡ 私ケツ穴が弱いのでやめてやめて伏黒のクンニでなんかイきたくないよおおおおおおおおおおおおおおおお……っ！♡ んんんんんっ、んんんん……っ！♡」

「釘崎いつ♡ お前もお前のまんこも可愛いよ……っ！♡ 禪院先輩におまんこペロペロされながらお前のケツ穴よしよしできるなんて最高だっ♡ ツンツンしてる女の弱点がうんこの穴だとか最高過ぎるっ♡ 釘崎の肛門の匂いもう俺覚え

たからっ♡ 舌入れてやるっ、うんこの穴にも舌ブツ刺してやるからこのままでイけっ！♡ 俺のペロ肛門で銜えたまま

イってくれ釘崎っ！♡ イけったらイけっ！♡ ああああ

ああお前のメス声すげえ可愛いよ野薔薇あ……っ！♡

「あーくそっ、もうイったのか!?!♡ 尻穴弱すぎだよ野薔薇っ！♡ 私まだ全然クンニしてもらってないじゃんかあ……っ！♡」

それぞれの感想を言い合いつつも下品なポーズを誰も止めず、宿雛がよしと許可を出すまでそれは続いた。

見事野薔薇をイかせた恵は、座り込んだほかの二人に抱かれ、仰向けになって股を開く。頭や腕に女たちのむっちりとした乳

やら腕やらが当たって、どきどきどきと鼓動が跳ねた。

「———そういえばお前、五条悟の女なんだそうだなア?♡」

挿入を心待ちにする恵の耳に、今一番聞きたくない人物の名

が飛び込んでくる。  
五条悟。

呪術高専の教師であり宿儺に対峙できるだけの実力を持った人類の希望であり、そして、彼は恵の恋人なのだった。五条悟の女、という宿儺の表現をもっと的確にするならば、同性カッブルの女役、といったところだ。

「あ……の、それ、は……」

恵が口ごもるのも無理はなく、なにせ彼氏がいるのにほかの男とヤったばかりの身だ。それも、女性化させられ避妊もせず注がれたとくれば、なおたちが悪い方だろう。こんな状況なのだから、宿儺に嵌められてしまったのだから、と、無意識に悟のことを思い出さないようにしていた己に気付き、恵の頬をさつきまでとは温度の違う汗がつつたう。

「奴の、魔羅と俺の魔羅。お前はどちらが欲しいんだ……？」

「あう……！！♡」

そんなの、聞かれなくたって決まっている。

恵は悟を愛していた。綺麗な顔も、ところどころ粗野な言葉も、背が高くて手が大きいところも全部がとても好きだった。

ただ、セックスだけは別なのだった。優しすぎるのだ。せつかくの長くてカリの張ったペニスも、そつと抜き差しするくらいでは全然足りない。普段は眉をしかめたくなくなるくらい口が悪いのにベッドの上の悟はまるで別人で、「愛してるよ」とか、

「やっぱり恵が一番可愛い」などと、砂糖菓子のような言葉をたくさんたくさん与えてくれるのだ。

本当は、そうじゃなくて。

恵は自身の願望を、ようやくはつきりと自覚し始めていた。恵の肉体を勝手に改造して、野薔薇や真希まで使って、徹底的に貶めて辱めて。両面宿儺という怪物にしかできないようなこんなひどい真似をされて、恵は。心の底から、胎の奥から、欲情の炎に身を焦がしていたのだ。

「……つさ、悟さんのお利口恋人ちゃんぽなんかよりずつとおおとおお……つ！♡ 宿儺様のおつ、宿儺様の極悪なおちゃんぽ様が最強れすつ！♡ 恵が好きなのはつ、どびゅどびゅ♡って赤ちゃんの種出されちゃいたいのあああああつ、宿儺様の意地悪強引デカちゃんぽですつ！♡ おつきなちゃんぽでがつつんがつつんハメ倒しながらこの馬鹿女がつて罵倒されたいんですつ！♡ 脳味噌からつぽ女とかつ、デカ乳オナホとかつ、せ、……精液便所、とかああああああああああああ……つ！♡ くそみにけなしながらおまんこ突いて欲しいつ！♡ 奥までどつちゅんどつちゅんブチ込んでつ、それではしたくない穴騾けて欲しいんですつ♡ 宿儺様、宿儺しゃまあ、あ、あ……！♡ んっほおあああああああああああああああああ……」



す。揃って蹲り裸の尻を持ち上げ、ぷりん♡ぷりん♡と横に振っては熱のこもった視線を主の肉棒へと送る。

並んで尻を振れというところまでは宿儺の指示であったし、それ以外の部分は彼女たち自身の判断によるものだった。そうする方が宿儺にも喜ばれ、また自分たちも悦びを得られるのだと、突っ走ってしまった結果だった。

「く……♡ はは、愉快、愉快！♡」

「ああんっ、宿儺様ア！♡」

「おちんぼしゅっごいっ！♡」

「めぐのまんこは貴方様のものですよ！♡」

今度は女たちの尻を三個積み上げて尻のタワーのようなものを作り、肛門、膣、肛門、膣と、上から順にずぼずぼと犯して宿儺が笑っている。一番上の野薔薇の尻から始まって、一番下にいる恵のヴァギナまで、繰り返し繰り返して、気の済むまで一突きずつ挿入しては乱暴に引き抜いてまた次の穴を食る。

「お……おちんぼ……♡ ケツ穴犯したおちんぼ様あ……♡」

「雄様の大切な証を……♡ 私たちのおクチで、綺麗にしてさしあげますう……♡」

「……んむっ、ふあう、宿儺様ああ……♡」

さらには彼女たちのすべての穴へ一発ずつ射精したあと、宿儺は未だにそり立つ肉茎と、尻穴とを三人に口淫させた。

偉そうに腕組みをして仁王立ちする宿儺のペニスを、野薔薇と真希とが跪いてぺろぺろと丁寧な舐めまわしている。

背後に跪いているのは恵一人で、彼女は宿儺の尻肉を割り、その奥の窄まりを執拗にしゃぶっていた。愛しい人と接吻でもするように熱心に縁を唇でしごき、奥まで舌を差し込んでぐりりと一周なぞってみせる。

「……ふふ♡ 男の尻穴は初めてか、伏黒恵？♡ 五条悟にはしてやったのか？♡」

「いいえ、いいえ、宿儺様……！♡ こんなプレイはあの男には到底無理なのですっ♡ 優しすぎて、とても……！♡ 恵はこうして男様にお仕えしたかったのにつ！♡ お尻を叩かれたりっ、ろうそくの蠟を垂らされたりっ、下品な台詞を言われたりしてっ、浅ましいメスっぷりをあざ笑って欲しかったの……っ！♡ あいつにはこんな真似はできないのです！♡ だからこうして宿儺様にご奉仕できてっ、今最高に幸せですっ！♡ 宿儺様の肛門を一生舐め続けますっ！♡」

「悪くないな♡ そら、お前も気を抜くな♡ 出すぞ、出すぞ……！♡」

「んぶぶぶぶうううっ！♡」

宿儺は野薔薇の頭を掴んで、喉奥に怒張を突っ込んだまま射精する。その間も、三人の女たちはそれぞれ片手で宿儺の陰囊をふにふにさすさすと揉みしだいており、徹底的に隷属した姿







しを固定する、要するに犬の「ちんちん」の姿勢で両面宿儺を  
見上げている。

宿儺は服従を示す淫らな愛玩犬に邪悪な笑みをしてみせる  
と、その顔面に勃起した屹立をべぢん！♡と垂直に打ちつけ、  
それからずりずりと左右に往復させて自慰をした。

「あああ、あ、宿儺様あ……っ♡ 恵のお顔でオナニーしてく  
ださって♡ 幸せでひゅう……っ♡ 顔を道具みたいに  
使って頂いて最高の気分ですうう……っ！♡ もっと♡  
もっと恵のことっ♡ やらしく使ってやってくださいいい  
いい……っ！♡」

「ほう……見上げた心構えだな♡ では便所にでもなるか？  
」♡

「はいっ！♡ なりますう、喜んで！♡」

あまりの即答に、宿儺がクク♡と笑いを零す。

かくして、人間便所・伏黒恵が爆誕してしまうことになった。  
相変わらずの「ちんちん」ポーズで瞳を輝かせている恵から  
宿儺は数歩距離をとり、堂々とした様子で陰茎を構える。

「ふふ♡ 有難く飲めよ……、そら！♡」

「んぶぼへえええああああああああああああああああああ  
ああああ………~~~~~~~~~~………  
っ！♡」

〓サンプルは以上です！ 読んで頂いて有難うございま  
した！



# 奥付

「五●悟と付き合ってる恵が  
爆乳女体化させられて  
宿讎様の呪王雄ちんぽに完全敗北する話。」

【発行日】 2022年05月07日

【発行者】 みたいわ南国

【発行】 南国飯処（み）

【印刷】 株式会社ポプルス

【連絡先】 mitaiwanangoku@gmail.com

【pixiv】 <http://pixiv.me/mitaiwanangoku>

【twitter】 <http://twitter.com/MitaiwaNangoku>

【BOOTH】 <https://kakkomi.booth.pm/>

表紙イラストはふなださまにお願いをさせて頂きました！  
有難うございました！

◆ネットオークション、フリマアプリ等での転売はご遠慮ください◆

# ◆この本には以下の内容が含まれています◆

淫語/♡喘ぎ(男女ともに)/羞  
/体型への執拗な嘲諭/性的な暴  
師を見下す表現/強制オナ  
ニ/唇を侮辱する発言/尻を振って  
ンクス/スパンキング/ろうそく/乳/  
特級呪物の指)/強制排泄(特  
オナニ/ 雌便器/乳/小ソコ/  
集団凌辱/呪術高専所属の女  
人拓/浴尿/歌いながら公然放  
ストファック/寝取りメッセー  
ジ/脱肛/くしゃあ/おまんこマー  
ク/発言/親子であねだり/幼女  
影/性器・肛門を焼/呪  
裸土下座/尻を蹴る/  
あつかい/  
お母乳

恥/乳/言葉責め/男尊女卑表現  
力表現/キャパ崩壊/常識改変/呪術  
-実況/土下座/顔呼び/寝取  
歌/尻責め/お掃除フェラ/アコ  
頭を下着をかきさせる/異物挿入(  
級呪物の指)/まんペ/犬/乳/顔面  
連続潮吹き/膣へ放尿・逆貫射/  
性全員で公衆肉便器/乳/ま  
尿/乱交/輪姦/ハム撮り/二六ワ  
動画撮影/ダブルピース/孕/乳  
を焼き印/女児を産ませて犯す  
姦/親子丼/乳/強制排便/最  
術高専所属の女性全員で全  
頭を踏む/蹴り飛ばす/  
女性器を踏  
れ!

**・野薔薇&真希×爆乳♀恵、爆乳♀恵×野薔薇&真希 ※16ページ程度**

女性優位/乳首ピアス/暴力表現/手マン/女性蔑視表現/くしゃあ見せつけ/ハイイ/耳舐め/連続絶頂/あっぱん/顔面オナニ/  
膣に鼻を挿入/クンコ/ンクス/アコ/ンクス/顔面に排便/顔面にぬりつける/スパンキング/強制まんペ

**・宿難×野薔薇&真希 ※7ページ程度**

洗脳/性奴隷化に奉仕/オナニ見せつけ/口内に挿しつけ/異物挿入(特級呪物の指)/女性蔑視表現/ストファック/

**・野薔薇×真希、真希×野薔薇 ※3ページ程度**

手/手マン/

**・悠仁×爆乳♀恵 ※3ページ程度**

肛ニ股オナニ見せつけ/ハート目/あねだり/くしゃあ/女性蔑視表現/

**・直哉×真希 ※1ページ程度**

エロ動画拡散/全裸撮影/親族一同でセリハラ/姉妹で性交待強要/

**・複数モブ×爆乳♀恵&野薔薇&真希 ※7ページ程度**

唾吐き/集団凌辱/輪姦/強制浴尿/ダブルピース/鼻の穴・耳の穴へ放尿・射精/アナルへ放尿・逆貫射/顔面・膣踏みつけ/パ  
ニスでピンク/顔面へ排便/連続潮吹き/公開オナニ/公開セックス/ストップ/ゴミ箱をかきさらされる/残飯/ゴ○うた性器の口に  
詰められる/性器+肛門へ根性焼き/殴る蹴る/異物挿入(槌・刀)/クビ/アソ

# ◆この本には以下の内容が含まれています◆

淫語/♡喘ぎ(男女ともに)/羞  
/体型への執拗な嘲諭/性的な暴  
師を見下す表現/強制オナ  
リ/情を侮辱する発言/尻を振って  
ンクス/スパンキンぐ/ろうそく/ケイ/  
特級呪物の指/強制排泄(特  
オナニー/ 雌便器/ケイ/小ソコ/  
集団凌辱/呪術高専所属の女  
人拓/浴尿/歌いながら公然放  
尿/アナル/寝取り/メッセー  
ジ/脱肛/くしほ/おまんこマー  
ク/発言/親子であねだり/幼女  
影/性器・肛門を焼く/呪  
裸土下座/尻を蹴る/  
あつかい/  
お母乳づ

恥/ケイ/言葉責め/男尊女卑表現  
力表現/キャラ崩壊/常識改変/呪術  
-実況/土下座/尻呼び/寝取  
歌/尻責め/お掃除フェラ/アノ  
頭に下着をかぶせる/異物挿入(  
級呪物の指)/まんペ/犬ケイ/顔面  
連続潮吹き/膣へ放尿・逆貫射/  
性全員で公衆肉便器/ケイ/ま  
尿/乱交/輪姦/ハム撮り/二六ワ  
動画撮影/ダブルピース/孕みケ  
を焼き印/女児を産ませて犯す  
姦/親子丼/ケイ/強制排便操  
術高専所属の女性全員で全  
頭を踏む/蹴り飛ばす/  
女性器を踏  
レ/

## ・野薔薇&真希×爆乳♀恵、爆乳♀恵×野薔薇&真希 ※16ページ程度

女性優位/乳首ピアス/暴力表現/手マン/女性蔑視表現/くしほ見せつけ/ハイイ/耳舐め/連続絶頂/おっぱん/顔面オナニー/  
膣に鼻を挿入/クンコリ/クス/アノ/クス/顔面に排便/大便を顔にぬりたくる/スパンキンぐ/強制まんペ/

## ・宿難×野薔薇&真希 ※7ページ程度

洗脳/性奴隷化に奉仕/オナニー見せつけ/口内に唾吐きかけ/異物挿入(特級呪物の指)/女性蔑視表現/アナル/アナル/

## ・野薔薇×真希、真希×野薔薇 ※3ページ程度

手/手マン/

## ・悠仁×爆乳♀恵 ※3ページ程度

肛二股オナニー見せつけ/ハート目/あねだり/くしほ/女性蔑視表現/

## ・直哉×真希 ※1ページ程度

エロ動画拡散/全裸撮影/親族一同でセリハラ/姉妹で性交待強要/

## ・複数モブ×爆乳♀恵&野薔薇&真希 ※7ページ程度

唾吐き/集団凌辱/輪姦/強制浴尿/ダブルピース/鼻の穴・耳の穴へ放尿・射精/アナルへ放尿・逆貫射/顔面・膣踏みつけ/パ  
ニスでビンク/顔面へ排便/連続潮吹き/公開オナニー/公開セックス/ストップ/ゴミ箱をかぶられる/鉄板ごころ/女性性器の口に  
詰められる/性器+肛門+根性焼き/殴る蹴る/異物挿入(槍・刀)/ケイ/アナル/